

調査に寄せられた
中高生の自由意見

誰かに相談する余裕なんてない。それよりも、今日1日どう過ごすかでいっぱい

友達に暗い話をするとうるさく、悩んだり苦しみを伝えたくても話せない

今の状態はしんどい。全部を代わってほしいとか、ここから逃げ出したいわけではなく、私にも少し余裕が欲しい

睡眠、勉強の時間不足」「悩み 話せない」

母親は横になることが多く、買い物や料理は女性が多かった。夕食はいつもパン。

た中学時代を振り返る。病気の母親と2人暮らしだった。大阪府の女性(40)は、

「勉強どころじゃなかった。毎日、精いっぱいだった。毎日、精いっぱいだった。毎日、精いっぱいだった。」

◆いつも疲れていた

大人の代わりに家族の介護や家事を担う「ヤングケアラー」が、深刻な状況に直面している。国の初の調査で、中高生の20人に1人いることがわかった。勉強や睡眠時間が不足し学校生活に支障が出たり、誰にも相談できずに孤立したりする実態が浮かび上がった。国は5月に対策をまとめる方針だ。

ヤングケアラー
深刻な状況

見かねた友達が、手の込んだおさが入った弁当をくれたこともあった。うれしさとともに「なんだろう……」とさみしさもこみ上げた。母親を一人にするのが心配で、部活動も修学旅行も諦めた。

家計のために卒業後は就職し、定時制高校に通った。体はいつも疲れていたが、そんな日々が当たり前だと思いつつ、自分からは助けを求めなかったという。

女性は今、講演会などで体験を語っている。「困っていることに気づき、サポートしてくれる大人が必要」と訴える。

「世話をしている家族がいる」と答えたのは、中2が5・7%。平日のケアの時間は1日平均で約4時間、7時間以上も1割に上った。「勉強する時間が取れない」「睡眠が十分」「進路の変更を考えざるを得ない」などの訴えも目立った。

家族の世話を始めた時期は平均で11歳、中2の半数は小学生の頃からケアを担っていた。対象はきょうだいが多いが、多くは、父母や祖父母が病気で、6割が「相談しても状況は変わらない」などとして、学校などに相談した経験がなかった。

大阪歯科大の浜島淑恵教授(社会福祉学)は「と話している。」

◆小学生から世話

調査は厚生労働省と文部科学省が昨年12月〜今年2月、公立校に通う中2と高2にインターネットで実施し、計1万3777人から回答を得た。

- 1 ヤングケアラーとはどのような若者を指しますか。後ろに「～若者」が続くように記事から18字で抜き出しましょう。

大人の代わりに家族の
介護や家事を担う 若者

- 2 大阪府の女性は、なぜ取材に経験を読んだのでしょうか。適切なものを全て選びましょう。

① ③

- ① 自分の過去の体験が新聞に載れば、大人が困っている子に気づき、支援につながると考えたから。
② 中学生時代の自分を助けてくれなかった周囲の人を今からでも非難したかったから。
③ つらい毎日が当たり前だと思ってしまう、声を上げられない子どもの気持ちを代弁したいから。
④ お金がないために、修学旅行に行けなかったことを今も後悔しているから。

女性は、自分の中学生時代について「自分からは助けを求めなかった」と振り返り、「サポートしてくれる大人が必要」と訴えています。

記事はまず、ヤングケアラーが、誰にも相談せずに孤立することを避けることが重要と指摘しています。

- 3 文章全体から判断すると、に入る言葉として最も適切なものは次のうちどれですか。番号で答えましょう。

①

- ① 「ケアを担う子どもが孤立しないよう、周囲の大人が問題に気づき支える仕組み作りが大切だ」
② 「ケアを担う子どもが、家計のために進路を変えなくて済むよう、まず経済的な援助をすることが大切だ」
③ 「ケアを担う子どもが体調を崩さないよう、まず十分眠ってもらえる体制をつくるのが大切だ」

読んでみよう！

◆ミー太郎のおすすめ記事



オンラインでケアラーと交流する持田さん（東京都内）

「きょうだいケア」を支援する

ケアラーアクション
ネットワーク協会代表理事 持田恭子さんに聞く

介護や看護が必要な家族の話や家事を担う「ヤングケアラー」。幼い頃から病気や障害を持つ兄弟、姉妹のケアにあたるケースもある。交流会などを通じてケアラーを支援する一般社団法人「ケアラーアクションネットワーク協会」の代表理事で、自らもヤングケアラーだった経験を持つ持田恭子さん（54）に話を聞いた。
（阿部明霞）

障害ある兄守った孤独の日々

「妹としてではなく、兄を守る『姉』として育ったようなものだった」

持田さんは、ダウン症で中等度の知的障害もある兄（56）との幼少期の日々をそう振り返る。小学校から帰ると、別の学校に通っていた兄をバス停まで迎えに行き、食事やトイレの面倒を見た。

心ない言葉で兄がからかわれ、石を投げられたり、ランドセルを引っ張られたりするいじめにも遭い、常に兄の手を引いて、守る日々だった。

兄のことを周囲から色々言われる生活が嫌になり、中学、高校は地元から離れた私立校を選んだ。兄のケアから遠ざかり、学校では兄の話 avoided。

高校3年生の頃、兄の病気の



どで病院通いが続き、勉強が手に着かなくなった。専門学校に進んだ後、大学も卒業したが、家族から離れて暮らすようになっていったという。

35歳の時に父親ががんで闘病するようになると、父が担っていた兄の世話を肩代わりするようになった。ケアが再び始まった。

いじめや悪口

悩んだ幼少期

母の介護も

仕事と板挟み

父をみとった後、母も要介護5で寝たきりとなり、母と兄の世話と、仕事を両立することに。外資系の銀行の管理職だったが、介護との両立で思うように仕事もできなくなったという。だんだんと在宅介護が限界になり、母も兄も施設に入るようになった。

体は楽になったが、「私がいけないと兄は生きていけない」と思い込んだり、離れて暮らすことになった母と兄からも責められたりして、介護うつになった。誰に相談していいかわからず、「自分のことをわかってくれる人はいない」と孤立感を抱えた。

（2021年1月26日 読売新聞朝刊より）

持田さんはその後、ケアする人同士の交流の場を作り、

ケアする人自身の人生を大切にしてほしいと訴えているそうです。



学習指導要領との対応表

読むこと		構造と内容の把握	精査・解釈		
		ア	イ	ウ	エ
設 問	1	○			
	2				○
	3		○		